

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	東邦脳神経外科女医会"
別タイトル	Women's Neurosurgical Association of Toho University School of Medicine"
作成者（著者）	岩淵, 聡
公開者	東邦大学医学会
発行日	2013.09
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 60(5). p.311 312.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	論評
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.60.311
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD75998241

“東邦脳神経外科女医会”

昨年放映されたNHK朝の連続テレビ小説「梅ちゃん先生」は、まだ記憶に新しいところである。東邦大学の前身である帝国女子医学専門学校は、大正14(1925)年に東京の大森・蒲田に創設された。終戦後昭和22(1947)年、教育基本法・学校教育法公布に伴い、東邦女子医学薬学専門学校と校名が変更され、学校法人東邦大学に改組されたのは昭和26(1951)年のことである。そのため、本学では帝国女子医学専門学校時代からこれまでに多くの女性医師を輩出してきた。

しかし、こと脳神経外科に関しては平成13年の卒業生が本学出身者の第1号女性医師であるため、東邦大学の女性脳神経外科の歴史はまだ浅いが、ここ数年1名ずつではあるが、平成19, 20, 22, 23年卒の女性医師が前期研修を終えたのち脳神経外科医として研鑽を積んでいる。したがって現在本学出身の女性脳神経外科医は全部で5名ということになり、うち2名は大橋病院、2名は他大学、1名は一般病院に勤務中である。

わが国全体でみると、平成24年9月現在、日本脳神経外科学会女性会員数は475名(全会員8854名の5.4%)、女性専門医は287名(全専門医7119名の4.0%)である。日本全国の医学部数が80であることを踏まえると、単純に計算すると1大学あたり女性脳神経外科医の数は平均5.94人ということになる。日本脳神経外科女医会が設立されたのは平成2年に遡るため、東邦大学における女性脳神経外科医の誕生は他大学にやや遅れをとった感はあるものの、人数では平均的レベルに追いついてきたといえる。

一方、女性医師数からみて、最近の脳神経外科は外科系科目の中でどういった位置にあるのだろうか。平成21年の「日本医学会分科会における女性医師支援の現況に関する調査報告」によれば、日本医学会分科会の女性医師会員の割合は14.6%、外科系学会では6.3%、女性医師の割合が多い外科系学会は形成外科22%、小児外科10%、外科5%、脳神経外科5%と続く。さらに新入会の女性医師数の割合(平成19年)をみると、日本医学会分科会で23.5%、外科系学会で15.8%と近年、外科系学会にも女性の入会が増加している。その中で女性医師の新入会割合が多い外科系学

会は、形成外科44%、外科22%、小児外科18%、脳神経外科16%と続いており、脳神経外科医を志す女性医師が増加していることがうかがえる。

医学部入学者に占める女性の割合が30%を超える現在、女性医師数は年々増加している一方で、女性医師が離職するケースは少なくなく、またいったん離れると復職は決して容易ではない現状がある。脳神経外科を志す女性医師がせっかく増加しても、継続就労やキャリアアップについて支援を行っていかねば、女性が脳神経外科医として仕事を続けることは難しい。以前3K(きつい、汚い、危険)といわれた脳神経外科においては、女性医師達が就労を継続できる環境を整備することは極めて重要である。具体的には全体組織(大学)、部署(教室)、そしてパートナーからの協力・支援が必須であり、そのどれが欠けても女性医師の就労継続は困難となる。その意味で東邦大学に①女性研究者支援体制の整備、②育児と研究の両立支援、③女性医師支援事業、④キャリア支援・次世代育成、⑤職場の意識啓発と広報を骨子とした、男女共同参画推進センターが設立されたことは、大変心強い限りである。一方、教室としての支援の1つにsubspecialtyの確立が挙げられる。Subspecialtyを習得し、専門性を保ちながら活動を継続して行くことはmotivationの向上、個々のキャリアアップにもつながるものと考えられる。幸い欧米と異なり、わが国の脳神経外科医の診療範囲は救急医療や外科手術だけではない。脳梗塞をはじめとする脳卒中全般、カテーテルを用いた脳血管内治療、ガンマナイフをはじめとする放射線治療、画像診断などの神経放射線学、リハビリテーション、脳ドックなどの予防医学、神経病理学、認知症など多岐にわたることから、女性においても興味を持てるsubspecialtyはきっと見つかるものと確信している。

今年7月に本年度脳神経外科研修をスタートしたばかりの女性脳神経外科医を連れて、フンボルト大学・ベルリン自由大学附属病院(Charité—Universitätsmedizin Berlin)の脳神経外科を訪れた。38歳の若さで主任教授の職に就いた国際的に有名なVajkoczy教授のもとにさまざまな国から多くの若い脳神経外科医が勉強に来ている。早朝手術カ

ンファレンスでは、女性医師も多く見受けられ、中でもチーフレジデントの女性脳神経外科医がその日に行われる多くの手術症例について、手際よくプレゼンテーションを行っていたことが印象に残った。その夜晚餐の席で、Vajkoczy教授に「女性教室員が多いですね。ドイツには女性脳神経外科医は多いのですか？」と尋ねたところ、「いい質問ですね。私がベルリンに来る前はこの施設に女性脳神経外科医は誰もいませんでしたよ。これからは女性脳神経外科医を育成することが脳神経外科の発展には欠かせません。」と答えてくれた。

前述の本学出身第1号女性脳神経外科医が、この8月から University of California, Los Angeles (UCLA) の放射線医学講座、神経放射線部門に留学した。出発前に開かれた壮行会の席には他施設で研修している女性脳神経外科医もかけつけ、同日“東邦脳神経外科女医会”が発足した。今後も本学の女性脳神経外科医師、専門医育成のために、さらなる環境整備と subspecialty の習得を導いていきたい。そして“東邦脳神経外科女医会”の発展を祈念する次第である。

(脳神経外科学講座(大橋)教授:岩渕 聡)